

## 習近平の強軍思想と強化される党の安全保障

塩澤 英一

Xi Jinping's Thinking on Strengthening the Military and  
Reinforcement of Party Security

Eiichi SHIOZAWA

### はしがき

中国共産党の習近平総書記（国家主席）は2017年10月の第19回党大会の政治報告で、中国人民解放軍の在り方について「世界一流の軍隊」を目指す「強軍思想」を提起、党規約にも「習近平の強軍思想」が明記され、人民解放軍の指導思想となった。「習近平政権の着地点」研究プロジェクト I では、習近平が2012年の総書記就任後に着手した国防・軍隊改革の実態と武装力の発展方向を分析した。習近平が2期目の節目で打ち出した強軍思想は国防・軍隊改革の理論的支柱であると同時に、政治思想や武装力まで含めた包括的な軍事思想と位置づけられている。本稿では公開資料のほか、習近平の軍内での発言などを通じて、「習近平の強軍思想」の実質や歴史的な位置づけの解明を試みると同時に、強軍思想には「国家の安全保障」とは別の「党の安全保障」傾向が強まったことを明らかにする。

## 第1節 軍指導思想の確立

### 1. 党規約に明記

習近平は2012年11月の就任直後から軍の内部会議などで国防・軍隊改革について積極的に発言してきた。その演説の中で「強軍」という言葉は使われており、また頻繁に「強軍興軍」というスローガンも強調されたが、「強軍思想」という名称はなかった。2017年8月1日、建軍90年の際に18回党大会以来進めてきた軍の改革・建設・戦略などが「新時代における党の強軍思想」を形成していると述べた<sup>1</sup>。その後、10月18日、第19回党大会の政治報告で習近平は軍の方向性について「国防・軍隊建設は新たな歴史の起点にあり…新時代の党の強軍思想を全面的に貫徹しなければならない」と「強軍思想」を公式に提起した<sup>2</sup>。党大会を受けて10月24日に改正された党規約には「習近平強軍思想」と明記され、総書記の名前を冠した軍事思想として確立した。

### 2. 党大会報告

政治報告で習近平は、党の指揮に忠実で強い軍隊を築くことが「中華民族の偉大な復興」を実現するための戦略的な支えであり、そのために強軍思想が必要だとしている。目標を「聴党指揮、能打勝仗、作風優良（党の指揮に従い、戦って勝てる、態度が優良）」と設定し、「世界一流の軍隊」を築くとした。更に「政治建軍、改革強軍、科技興軍、依法治軍（政治的に軍隊を建設し、強い軍隊にするために改革し、科学技術によって軍隊を発展させ、法によって軍を統治する）」という16字方針を示した。報告では、これだけしか述べておらず、その意味について多様な解釈が可能である。

<sup>1</sup> 山口信治（2017）、1ページ。「中国共産党第19回全国代表大会の基礎的分析：②習近平強軍思想」。

<sup>2</sup> 「在中国共产党第十九次全国代表大会上报告」（2017）。

第1表 強軍思想のポイント

自国への認識	大国から強国へ、世界第2の経済大国
党の地位	軍の党への絶対的忠誠、党の軍隊を徹底
強軍の目標	党に指揮に従い、戦って勝てる、態度優良な軍隊
強軍の必要性	中華民族の偉大な復興を実現するための支え
具体化方針	政治的に軍隊を建設、強い軍隊にするために改革、科学技術で軍隊発展、法によって軍を統治
部隊の改革	統合作戦指揮、主席責任制、戦区の設置
装備の近代化	AI、ビッグデータ、戦略ミサイル
法治化	党の指導力強化、腐敗封じ込め
軍民融合	民間活力導入

(資料) 党大会政治報告などから筆者作成

この党大会で習近平は「新時代の中国の特色ある社会主義思想」を党の指導思想として打ち出しており、強軍思想もその一環を成すものと位置づけている。「新時代の中国の特色ある社会主義思想」は党規約では「毛沢東思想」「鄧小平理論」「三つの代表重要思想」「科学的発展観」に続く党の指導思想として明記された。指導者名を冠した思想は毛沢東、鄧小平と習近平だけで、習近平は毛沢東、鄧小平に次ぐ指導者としての地位を誇示した。「習近平強軍思想」も実名入りで党規約入りし、軍事面で同様の権威付けが図られた。

### 3. 歴代指導者との比較

強軍思想は過去の指導者の軍事指導理論と比べてどのような特徴があるのだろうか。中華人民共和国が成立する以前、共産党の軍隊は共産革命を遂行するための軍隊だった。しかし革命が成就し建国した後、共産党は政権党となり、社会建設に着手する。体制を維持するための軍隊が求められるようになる。こうした時代的狀況下で、毛沢東は革命軍隊の人民軍隊化を進めるとともに、党の軍に対する絶対的な指導を徹底し、革命戦争のた

め膨らんでいた軍隊の人員削減などを進める一方、核ミサイル開発を進めた。

改革開放路線に大きく舵を切った鄧小平は経済発展を重視した。鄧小平の軍事思想は平和発展を基軸に部隊を削減、合理化することに主眼が置かれた。江沢民も鄧小平路線を引き継いで兵力削減を進めたが、同時に湾岸戦争での米軍の近代的な戦いを目の当たりにし、軍の近代化、ハイテク化の戦争を重視した。続く胡錦濤の時代に入ると世界の軍事革命（MRA）、軍事技術上の革新、特に情報技術の革新を強く意識するようになる。時代遅れとなった軍隊の調整に着手し、統合作戦指揮への改革や軍民融合なども指摘されるようになった。習近平の思想の特徴は「強軍」を宣言し、韜光養晦（自らの力を隠し蓄える）の姿勢を転換した。さらに「中華民族の偉大な復興」を強軍化の根拠に正面から据え、党の絶対的指導をあらためて徹底したことに特徴がある。

内容を細かく見れば、統合作戦指揮化、部隊編成の抜本的改革、党の絶対的指導などは胡錦濤時代から提唱されていた。党への忠誠では「革命軍人の核心的価値観」という名称で繰り返し強調されていた。ただ軍内でそれほど権力基盤が強くなかった胡錦濤は軍内の抵抗勢力にも配慮しなければならなかった。このため胡錦濤は「国防改革は部隊の安定とのバランスが重要」とも指摘し、大胆な改革に踏み切れなかったが、習近平は反腐敗闘争などを巧みに利用して軍内の抵抗勢力を封じ込め一気に改革を進めた。

毛沢東は建国後の軍隊の基礎を築き、その思想は中国軍内で「毛沢東軍事思想」と呼ばれている。その後の鄧小平の軍事理論は「鄧小平の新時期の国防軍隊改革思想」、続く江沢民も「江沢民の国防軍隊改革思想」、胡錦濤も「胡錦濤の国防軍隊改革思想」と表現される<sup>3</sup>。これに対し習近平の理論は「強軍思想」とより包括的な名称が与えられているのが特徴である。そして、その思想では毛沢東と同様に「党による軍隊の絶対的指導」が強

---

<sup>3</sup> 周俊杰（2018）。

第2表 歴代指導者の軍事思想の比較

	思想の特徴	軍事力の改革	時代背景
毛沢東軍事思想	革命の軍隊から人民の軍隊、党の絶対指導	規模の縮小、海空軍の整備、兩彈一星	中国革命の完成、社会主義制度の確立、冷戦対立
鄧小平の新時期の国防軍隊改革思想	経済建設優先、軍の正規化	兵力削減	改革開放路線
江沢民の国防軍隊改革思想	軍人道德規範、国軍化反対、穩健改革	三歩走、ハイテク条件下の局部戦争	冷戦終結、湾岸戦争、天安門事件
胡錦濤の国防軍隊改革思想	国軍化反対、党の絶対指導、革命軍人の核心価値観、軍民融合、軍の安定優先	統合作戦指揮改革、情報化戦争に対応	大国への安定期
習近平の強軍思想	世界一流の軍隊、偉大な中華民族の復興、党の絶対指導、軍民融合	統合作戦指揮、先進装備、部隊再編成、主席への権力集中	中国の大国化

(資料) 「党的国防和军队改革思想研究」などから筆者作成

調されている。鄧小平以降の3指導者の思想は改革・開放路線の延長線上にあるが、習近平の思想は毛沢東に次ぐ位置付けをしている。

それぞれの指導者の時代の国際環境を視野に入れると、軍指導思想における党の指導力重視やナショナリズムの度合いに相関関係があるようだ。毛沢東時代は米国やロシアという大国の脅威に直面していた。鄧小平時代は対米、対日関係が改善した。江沢民時代は天安門事件により世界的に孤立した。胡錦濤時代は世界的な対テロ戦争の中、中国との協調路線が強まった。習近平時代は中国の大国化に伴い国際社会の封じ込め圧力が強まっている。国際環境が悪化した時期には党の指導力、ナショナリズムが強化される傾向がある。軍の武装力強化は比較的一貫している。鄧小平時代は経済発展優先が明確で空母開発などが停滞した時期があったが、江沢民、胡錦濤時代に空母を初めとする海洋戦力、弾道ミサイル、ミサイル防衛システムなどの開発が進み、習近平時代もその延長にある。

第3表 歴代指導者思想と国際環境

	毛沢東	鄧小平	江沢民	胡錦濤	習近平
国際環境	悪い	良い	悪い	良い	悪い
党の指導	強い	通常	強い	通常	強い
ナショナリズム	強い	弱い	強い	弱い	強い
兵器開発	強化	減速	強化	強化	強化

(資料) 筆者作成

#### 4. マルクス主義軍事理論

社会主義の基本理論は習近平の強軍思想にも重要な意味を持つ。習近平は「強軍思想」という言葉を使い始めた2017年8月1日の建軍70年式典で「強軍を築くためには党の軍事指導理論を発展させなければならず、不断にマルクス主義軍事理論と当代中国軍事実践の新たな境地を開拓しなければならない」と強調した。また「マルクス主義軍事理論を強軍の偉大な実践の中に投射し、輝かしい真理の光を発しなければならない」とも説いた。強軍思想はマルクス主義軍事理論と中国的実践の結合としている<sup>4</sup>。

マルクス主義軍事理論とは何を指すのか。陸軍指揮学院の張翬副教授は「マルクス主義軍事理論の当代の価値は、社会発展と軍事運動の一般規律に対する科学的認識であり、このことにより、この理論は屈強な生命力と強大な歴史透視力を持っている。マルクス主義戦争観は＜軍事は政治に服従し、戦略は政略に服従し、政治・政略は特定の利益を体現している＞と認識しており、経済こそが戦争の本源だ。第二次大戦後、米国は多くの地域で衝突や局部戦争を起こしているが、すべてより多くの利益を獲得するためであり、＜階級社会では私有制が戦争の根源＞というマルクス主義の観点を重ねて証明している」<sup>5</sup>と述べている。

<sup>4</sup> 新華網 (2017)。

<sup>5</sup> 張翬 (2018)。

習近平は2018年5月4日のマルクス生誕200年では「『共産党宣言』発表から170年たつが、マルクス主義が述べた一般原理はいまも完全に正しい」と述べ、マルクス主義の「実践観、群衆観、階級観、発展観、矛盾観」を堅持するとした。軍事面ではマルクス主義戦争観は軍専門家が各方面で引用しており、「軍事は政治に服従する」ことが最重要なのだろう。

また解放軍報は「習近平強軍思想は、毛沢東の人民戦争戦略思想を豊かに発展させ、人民戦争の理論的価値を新たにした」と指摘している<sup>6</sup>。習近平のいう中国の軍事実践とは人民戦争論を指し、マルクス主義軍事理論と結合させようとしている。党の強力な指揮により、軍のみならず国民を幅広く動員することで強靱な国防力を目指す。この点を中国の特色ある軍事思想と位置づけている。

## 5. 思想は政策に直結

思想を「一つのまとまった考え方」とすれば、強軍思想はいくつかの方向を示しただけで十分に体系的とは言えない。中国指導部は権威付けを図るために「思想」と名付けたようにもみえる。ただ中国では指導者の思想が政策に直結する。マルクス主義をいまも理念に掲げるイデオロギー政党、共産党にとって価値観や思想は重要である。指導者の発した思想、言葉が繰り返し組織内で学習され、文書を通じて下部へと徹底されていく。軍であれば、戦区、部隊など各レベルの指導者は習近平の言葉を引用して論文を発表し、その言葉を付度して政策が具体化されていく。自由民主主義諸国よりも指導者の思想と政策決定の因果関係は明白だ。習近平の思想が前指導者より高い位置付けとなればそれだけ重要度は増し、学習の度合いも深まる。指導者の言葉が果たす役割は民主主義社会の我々が考える以上に大きい。官僚の付度の度合いも深い。

軍事科学院の理論家、張学良は強軍思想を解説する『強軍論』で「習近

---

<sup>6</sup> 解放日報（2017）。

平の強軍思想は、中国共産党が新時代の中国が「大」から「強」へ発展する重要な段階にどのように強軍を推進するか、中国の夢と強軍の夢を実現するかという重大な課題を正しく解決するためのガイドライン」と位置づけてその重要性を強調している<sup>7</sup>。

## 第2節 思想の実践方向

### 1. 政治建軍

党大会の政治報告が述べている強軍思想の16字の4方針とは何を意味するのか。「政治建軍（政治的に軍隊を建設する）」とは、「聴党指揮（党の指揮に従う）」の軍隊づくりを意味する。習近平は総書記に就任し、新たな中央軍事委員会メンバーを決めた2012年11月15日の最初の中央軍事委員会常務会議での講話で「各自の工作上、思想政治建設は最優先にすることを堅持し、適時部下の兵士士官に思想を伝えなければならない」と強調している。また「旗印を高く掲げ、党の指揮を聞く、これは党と人民が軍隊に求める根本的政治要求である。党が軍隊に対する絶対的な指導を堅持するという根本原則の問題上、軍隊の誠実、趣旨、本質に関わる重大な政治問題上、軍事委員会の同志は頭を特別に明晰にし、態度を鮮明にし、行動は特に断固としたものでなければならない」とも述べている。この会議では①国際情勢や世界の軍事革命など重大な問題に関心を怠らないことや②改革やイノベーションの精神を大切にすること③党内の団結を重んじることなど計7項目の意見を述べたが、「政治思想建設」が筆頭で、最重要であることを示した<sup>8</sup>。

また習近平は軍隊の非政治化、国軍化は絶対に認められないと繰り返し強調している<sup>9</sup>。鄧小平時代には党軍の国軍化の模索もみられたが、1989

<sup>7</sup> 張学良（2019）、262ページ。

<sup>8</sup> 習近平（2014）、「加强军委班子自身建设」。



年に起きた民主化運動を弾圧した天安門事件以降はあらためて党の軍隊の重要性が再認識された。いま江沢民、胡錦濤時代以上に国軍化を戒める論調は強くなった。

組織改革を経て2017年10月に発表された中央軍事委員会の新委員には、中央軍事委員会規律検査委員会のトップ、張昇民書記が入った。軍事中央委員数は以前の8人から4人に半減（委員とは別に副主席2人は維持）し、陸、海、空、第2砲兵の4軍種司令官は委員にならなかったにも関わらず、規律検査委書記が委員となったことは政治重視を示している。以前は総参謀長、総政治部長、総装備部長、総後勤部長の4総部トップも委員入りしていたが、2017年に新委員のポストを確保したのは総政治部長だけだった。

## 2. 改革強軍

「改革強軍（強い軍隊にするための改革）」とは軍部隊の再編、主に統合指揮化や軍区から戦区への組み替え、4総部の解体・再編など一連の組織改革を指している。習近平は2014年3月に中央軍事委員会に国防と軍隊の改革を深化させる小組（グループ）を設置し、自ら組長について改革案を主導した。2015年11月24～26日に開いた中央軍事委員会工作会議で、強軍の夢実現のため「国防・軍隊改革を深化させる」と改革着手を正式に表明した。以降、第2砲兵部隊のロケット軍への変更、軍の指導機関だった総政治部ら4総部を15の専門部局に分散する再編、7軍区の5戦区への再編など次々と組織改革を進めた。この改革の詳細はI期目の総括で報告しており<sup>10</sup>、詳述しないが、7回の軍改革を行った毛沢東と比べても一度の改革としては組織から政策、制度までその対象範囲は広く、建国以来最大規模と言われる。この過程で軍のトップ習近平中央軍事委員会主席への権限集中がはかられた。

<sup>9</sup> 習近平（2014）、「在中央军委扩大会议上的讲话」「确保军队建设坚定正确的政治方向」。

<sup>10</sup> 塩沢英一（2019）、「中国軍の国防・軍隊改革の特徴と武装力の方向についての一考察」亜細亜大学アジア研究所。

### 3. 科技興軍

科技興軍（科学技術による軍の発展）は、ハイテクの戦略的導入による装備の大幅な向上を指している。そのための「軍民融合」が鍵となっている。2019年7月に発表された国防白書「新時代の中国国防」では科技興軍をめぐる「人口知能（AI）、量子テレポーテーション、ビッグデータ、クラウドコンピューティング、物のインターネット（IOT）など先進科学技術の軍事領域での応用を加速させており、国際軍事競争には歴史的な変化が起きている」との認識を示し、また「兵器の長距離精密化、スマート化、ステルス化、無人化は顕著だ」とも指摘した<sup>11</sup>。軍内の学習教材『军委主席负责制学习读本』は科学技術を民間と乗り入れる「軍民融合」推進を指摘した上で「拳国体制の優位性を十分に発揮して我が軍の科学技術のイノベーションを<追いかけて併走する>から<併走してリードする>へと局面を転換させ、軍事競争の主導権をにぎらなければならない」と述べている<sup>12</sup>。

中国軍は自主開発で空母を建造したほか、J20などの新型戦闘機を開発し、また米国も開発中の「極超音速兵器」の開発で先行している。党大会では「新型作戦力量」を発展させることも強調しており、先端的な兵器で米国に追いつき、追い越そうとしている。

軍民融合は科学技術振興での鍵となるテーマで、中国共産党は2017年1月に「軍民融合発展委員会」を設立して習近平が委員会主任を務め、「軍民融合を発展させるため、党が集中的に指導する」と強調した。2017年11月に通信機器大手の華為技術（ファーウェイ）が中国海軍の艦船を造る中国船舶重工集団とAI技術での協力協定を結ぶなど軍民融合が始まっている。

<sup>11</sup> <新時代の中国国防>白皮書（2019）。

<sup>12</sup> 中央軍事委員会政治工作部編（2018）、25ページ。

<sup>13</sup> 習近平（2014）、「牢记強軍之魂強軍之要強軍之基」。

#### 4. 依法治軍

依法治軍（法による軍の統治）は、人治が横行し、不透明である軍のシステムの制度化を指す。習近平は総書記就任間もない2012年12月10日、広州軍区での会議で「依法治軍、從嚴治軍是強軍之基（法による軍統治、厳格な軍統治が強軍の基礎）」と宣言し、軍内の綱紀肅正を訴えた<sup>13</sup>。背景には軍内での反腐敗闘争があったが、同時に法治が不足していることへの反省があったようだ。2015年2月に習近平は「新情勢下に法による軍統治、厳格な軍統治を深く進めることに関する決定」を下した。軍の法治に関する解説書『提高国防和军队建设法治化水平』は「依法治軍」は「作风優良（態度が優良）」な軍隊を確保するための根本的な支え」とし、出さ

第4表 中国軍に関連して出された法律や規則

規則、法律名	施行時期	力点
厉行节约严格经费管理的规定	2013年3月	綱紀肅正
关于加强改进军队领导干部经济责任审计工作的意见	2013年9月	綱紀肅正
军队审计发现违法违规线索移送办法	2014年7月	綱紀肅正
关于加强干部选拔任用工作监督管理的五项制度规定	2015年2月	綱紀肅正
严格军队党员领导干部纪律约束的若干规定	2015年4月	綱紀肅正
关于加强军队基层风气建设的意见	2015年6月	綱紀肅正
军队基层建设敢要	2015年修订	
关于军队经济适用房超面积处理有关问题的通知	2017年3月	綱紀肅正
军事立法工作条例	2017年5月	
关于严禁违规宴请喝酒问题的规定	2017年9月	綱紀肅正
中央政治局关于加强和维护党中央集中统一领导的若干规定	2017年10月	党の指導
中央军事委员会工作规则	2018大修订	党の指導
中央军委巡视工作条例	2018年1月	党の指導
中国人民解放军军事训练监察条例（试行）	2018年3月	党の指導
关于加强新时代军队党的建设的决定	2018年9月	党の指導
关于全面从严加强部队管理的意见	2019年1月	党の指導
人民解放军政治工作条例	修订中	党の指導

（資料）「提高国防和军队建设法治化水平」などから筆者作成

れた規則は広範囲にわたる<sup>14</sup>。

内容からみると、2017年までに経費に絡む規定や綱紀肅正に関する規定が多く、それ以降は党の指導力強化を意図した規定が相次いでいる。

### 第3節 党の対内安全保障

#### 1. 政治建軍が最重要

人民解放軍研究者の阿南友亮（2015）は、共産党が一党独裁を続ける中国の安全保障について、国民を守る「人間の安全保障」と党を防衛するための「党の安全保障」が混在すると指摘する。そして共産党は一党独裁体制を維持するため「党の安全保障」を強め、排外的なナショナリズムを積極的に培養していると指摘している<sup>15</sup>。

強軍思想の内容を示す4つの基本方針のうち、最初に挙げられるのは政治建軍であり、最も優先順位が高い。2つ目の「改革強軍」は戦力を高めるための再編だが、同時に軍の統帥権を持つ習近平中央軍事委員会主席へ権力を集中させる再編でもあった。強大な権力を持っていた4総部は解体されトップの権限は強まった。習近平は統合作戦総指揮も兼務している。4つ目の「依法治軍」では、多くの規則、法律が紀律を正し党への忠誠を強める内容だった。3つ目の「科技興軍」だけは、技術的な観点に見えるが、実現のための戦略である「軍民融合」は民間企業も党に積極的に技術供与することを意味し党への権力集中がセットになっている。そうしてみると4つの方針いずれもが党への忠誠が要となっており、政治建軍こそが最重要課題といえる。

強軍目標を解説する国防大学の教材は強軍思想の目標である「聴党指揮、能打勝仗、作風優良（党の指揮に従い、戦って勝てる、態度が優良）」に

<sup>14</sup> 陶传铭主编（2018）。

<sup>15</sup> 阿南友亮（2015）、「党の安全保障と人間の安全保障」。

ついて、「党の指揮に従うこと」こそが「戦って勝てる」ための「政治的保証」であり、「態度が優良であるための鍵」であるとし、「党の指揮に従うこと」が最重要であることを強調している。国防大学の教材『作风优良是我军鲜明特色和政治优势』<sup>16</sup>も「態度が優良」が「我が軍の政治の本来の姿の体現」で党の指揮に従うために重要としている。

「聴党指揮」を強調することは、裏返せば、党内で指揮に従わない現実もあるということだろう。江沢民指導部時代の中央軍事委員会の制服組元トップ、徐才厚、郭伯雄両元副主席は、権力を乱用して蓄財するなど腐敗が深刻だった。習近平はこれらを厳しく摘発するとともに軍権掌握を進めた。「政治建軍」は極めて現実的で深刻な問題で、党の求心力を高めるための「党の安全保障」強化は党の求心力維持のためと同時に、習近平本人の基盤固めにも必要だった。

## 2. 毛沢東を模倣

習近平は2014年10月31日に福建省古田鎮で開かれた全軍政治工作会議で「会議の重要な任務は整風（思想ややり方を正す）精神を貫徹し、新たな歴史条件下で党の思想上、政治上から軍隊を建設するという重大な問題を研究、解決し、我が軍政治工作の輝かしい伝統と優良な作風を発揚し、中華民族の偉大な復興という中国の夢実現のために全軍を動員し、党の新情勢下の強軍目標を実現するために団結して奮闘努力することだ」と述べた。「古田で会議を開くことは私が提案したことだ」とわざわざ言及した上で、1929年12月28日に同じ古田鎮で開いた工農紅軍第四軍第9回党代表大会で「政治建軍」の原則が確立したことを強調したのである。古田会議は紅軍で毛沢東が指導的地位を固めた歴史的な会議として知られる。またこの会議で、軍隊に対する党の絶対的な指導の原則が確認された。習近平はあえて歴史的な場所で政治工作会議を開催し、自らの地位と党の絶対的指導を

<sup>16</sup> 方文彬、邱圣宏（2018）2 ページ。

固めた。共産党内で何度となく「党への絶対忠誠」を軍に求め、徹底を図っている。この会議は徐才厚ら私腹を肥やした汚職幹部を党の指導を脅かしたと徹底糾弾する場でもあった。「徐才厚は人事上、権力を乱用していた。金銭や物を贈る人を重用し、贈り物をする人を抜てきした。誰を起用するかを組織の外で決め、誰を使うか彼の一部の仲間で決めていた」と名指しで非難した<sup>17</sup>。この会議でも中央軍事委員会主席に権力を一元化する「主席責任制」も改めて強調し、主席責任制は政治建軍の要となった。

### 3. 社会主義思想を強調

習近平の強軍思想は新時代の中国の特色ある社会主義思想の「軍事篇」であり、新時代の中国の特色ある社会主義思想を構成する軍事理論となる。中国はマルクス・レーニン主義に基づいて労働者階級が主役の国家を成立させた。中国革命の成功で、階級闘争は主要矛盾ではなくなったが、建国後の貧しい国情から「人民の日増しに増大する物質文化に対する需要と、後れを取った社会生産との矛盾」が主要矛盾となった。改革開放路線で中国は豊かになり、「新時代の中国の特色ある社会主義思想」でいまの主要矛盾は「人民の日増しに増大する素晴らしい生活への需要と発展の不均衡・不十分との矛盾」（19回党大会の政治報告）になった。

中国は既に相当に豊かになり発展段階は毛沢東時代の「站起来（立ち上がる）」から鄧小平の「富起来（豊かになる）」をへて習近平は「強起来（強くなる）」に入った。中国は建国から100年の1949年までは社会主義の初級段階にあるが、習近平の新時代の社会主義思想は「中華民族復興という偉大な夢」実現のため「強国」を目指している。

毛沢東は革命を担った党幹部が官僚化し、特権層となったことについて「官僚主義者階級と労働者・貧農・下層中農とは鋭く対立した2つの階級である」<sup>18</sup>などと激しく批判した。これが1960年代の反右派闘争の一因だっ

<sup>17</sup> 習近平（2015）、「在全军政治工作会议上的讲话」。

た。改革開放路線で、党の特権階級の腐敗は、当時よりはるかに深刻化しており、最近の習近平への権力集中や腐敗官僚の摘発は毛沢東が批判した「官僚階級の打破」を彷彿させる。習近平は、政治工作会議の中で、官僚主義、個人主義、自由主義を徐才厚らの腐敗とともに厳しく批判している。党内の権力闘争の中での自身の権力固めという狙いも軽視できないが、それだけではなく、プロレタリア独裁の正統性、党の尊厳、を維持するためにも党内の腐敗した特権層を抑え込む必要があった。

習近平は2013年7月15日の軍内部会議では「戦争とは政治の延長である。これはマルクス主義戦争理論の一つの基本的観点だ」と強調している<sup>19</sup>。党が軍を指導することの正当性をマルクス主義に求め「党の安全保障」の論拠としている。

#### 4. 武装警察を直轄

2017年の部隊編成改革では、人民武装警察を軍の指揮下に再編成した。以前は軍と国务院の双方の指揮下にあった。国务院は政府組織だが、実態上は共産党の支配下にある。それでもあえて軍単独の指揮下に置いたのは国内の重要な治安機関を党が100%掌握する狙いもあるだろう。海上警備を担当する海警総隊ものちに武装警察に編入され、領海、主権維持の活動に党の統制力を強めた。

#### 5. 天安門事件が教訓

指導部への忠誠や党の安全保障の重要性を徹底するため、習近平は歴史な事例をいくつも挙げて説いている。例えば、習近平は2017年2月4日の中央軍事委員会民主生活会では安禄山を例に挙げた。安禄山は表面上、唐の玄宗に忠誠を示し、玄宗は気を許していたが、後に安禄山は「安史の乱」

<sup>18</sup> 矢吹晋 (2018)、70ページ。

<sup>19</sup> 習近平 (2014)、「关于战争指导问题」。

を発動、唐王朝を滅ぼした。習近平は「高級軍人の不忠誠が政権を滅ぼした例は枚挙にいとまがない」と戒めている<sup>20</sup>。2012年12月26日の中央軍事委員会拡大会議ではソ連共産党が軍隊に対する指導を放棄したため危機に瀕した際に「ソ連軍は拱手傍観し、中立を装ったため、崩壊した」と指摘「深刻な教訓にしなければならない」と強調した<sup>21</sup>。

2014年10月31日の政治工作会議では1989年の「政治風波」（天安門事件）についても言及し、「軍隊が動揺したら結果はどうなったか想像も着かない」と述べた。軍隊の党への忠誠があったからこそ事件を克服し、共産党も存続を続けられたとの強烈な認識がある。この会議では、鄧小平が「軍隊は永遠に党が指導する軍隊だ」と総括したことも強調している<sup>22</sup>。天安門事件は建国以来、最大の党の安全を脅かす事件で、「党の安全保障」を再認識するきっかけとなった。

## 第4節 党の対外安全保障

### 1. 和平演変への警戒

強軍思想を含めた習近平の思想は「新時代の中国の特色ある社会主義思想」と呼んでいるとおり、鄧小平以降の指導者に比べ「社会主義色」を強めている。鄧小平理論や、江沢民の「三つの代表」、胡錦濤の科学的發展観には社会主義の文字は入っていない。しかし習近平は自分の思想にあえて「社会主義」を盛り込んだ。「三つの代表」は私営企業家も党に取り込み、党が広範な人民を代表するとするもので、社会主義政党の「プロレタリア独裁」特徴を薄めるものだった。胡錦濤の科学的發展観も持続可能な發展を意味するもので、社会主義とは直接関係はない概念だ。しかし習近平は自らの思想の「社会主義性」を強調してはばからない。強軍思想の基礎と

<sup>20</sup> 習近平（2017）、「在中央民主生活会上的讲话」。

<sup>21</sup> 習近平（2014）、「增强忧患意识、危机意识、使命意识」。

<sup>22</sup> 習近平（2015）、「在全军政治工作会议上的讲话」。



なっている習近平の軍内の発言からも社会主義重視が目立つようになった。

社会主義、マルクス主義色を強めた結果、自由民主主義国家への不信、警戒感も強まらざるを得ない。胡錦濤指導部には人権や民主主義といった価値観を人類共通の価値観だという発言もみられたのとは一変した。総書記、中央軍事委員会主席就任直後の2012年12月26日の中央軍事委員会拡大会議で習近平は「社会制度、イデオロギー面などで我々と西側国家は完全に異なり、これが我々と西側国家との闘争とせめぎ合いが調和不可能で、そのため必然的に長期的で、複雑で十分に尖鋭的であることを決定付けている」と強調している<sup>23</sup>。こうした自由民主主義国家と対決色の強い発言は枚挙にいとまがない。

2013年10月14日の軍幹部会議では「西側敵対勢力は我々の軍隊を西側化、分断化する重点とし、軍隊の非党化、非政治家を吹聴し、あらゆる手段で軍隊に政策を浸透させ、我が軍の性質を変えようと画策している。西側敵対勢力は、中国でカラー革命を起こすには軍を切り離す必要があると分かっているのだ」と述べている。

2014年10月31日の全軍政治工作会議では「西側敵対勢力は、ソ連解体、東欧激変後、我が国も倒せると思い、和平演変を強めた」と強い警戒感を示した。2014年12月26日の中央軍事委員会拡大会議では「一部の西側国家は我が国へのカラー革命を強め、ネット上で文化冷戦と政治的な遺伝子組み換え事業を強め、我が軍を去勢し、軍隊の党の旗印を引き下ろそうとしている。我々はイデオロギーと政治安全領域で厳しい試練に直面している」と文化領域での西側の価値観浸透を警戒している<sup>24</sup>。「国家の安全保障」と同時に「党の安全保障」が重要なことを吐露している。

<sup>23</sup> 習近平（2014）、「增强忧患意识、危机意识、使命意识」。

<sup>24</sup> 習近平（2017）、「在中央军委扩大会议上的讲话」。

## 2. 中国モデルへの自信

2016年以降の発言では、警戒感と同時に中国政治体制への自信もうかがえるようになった。2016年2月24日の中央軍事委員会拡大会議で習近平は「(18回党大会以来外遊20回で40カ国を訪問して強く感じたことは)数百年間、国際的なパワーバランスの変化は数回起きたが、すべて西側内部で起きた。しかし現在新興市場国家と発展途上国の力が明確に向上し、西側は国際情勢での地位は大打撃を受け、国際力量は分散化し、大国関係は全方位の新たな段階に入っている。グローバル統治体系は変革途上にあり、数カ国の西側国家が世界の大事を決めることができる時代は既に過去のものとなり、戻ることはない」と述べた<sup>25</sup>。リーマンショック後の世界経済の混乱、欧州連合(EU)での政治的混乱などを目の当たりにした。先進7カ国(G7)の指導的な役割が低下し、新興国を含む20カ国・地域(G20)の重要性が増したことが背景にある。

2017年2月20日の中央軍事委員会拡大会議の発言はもっと象徴的だ。「一部西側国家が長期にわたって国際事務を主導してきた優勢は次第に色あせつつある。世界的に地位の下降は花が散るように避けがたい」と自信に満ちていた。さらに「一部西側国家は彼らの政治制度モデルが世界で最良とずっと宣伝し、救世主の勢いで、いたるところで民主拡張を扇動し、カラー革命を賛同した。現在、西側国家では社会は対立、分裂し、統治集団が暗闘しいがみ合い、各党派が排斥しあい、政治スキャンダルは絶えず、国家の統治は矛盾に満ち、現代版「ハウスオブカード」を演じ、民衆は西側統治集団に失望している」と述べた。トランプ米政権内での政争や欧州での混乱を念頭に置いた発言とみられるが、民主主義のルールを無視し、自己中心的に振る舞うトランプ大統領の執政を見て自信を深めたことは想像に難くない。この会議では続けて「中国古代には党争があったが、いまは西側が党争をやっている。これに比べ、中国共産党の指導は我が国大多

<sup>25</sup> 習近平(2017)、「在中央军委扩大会议上的讲话」。

数の民衆の支持を得て、中国の特色ある社会主義は生き生きと輝き、西側国家とは鮮明な対照をなしている。多くの発展途上国の指導者と懇談したとき、みな西側の制度モデルに疑問を抱き、中国の発展の道を学びたいと表明し、ルックイーストは流行になっている」と自分たちの制度を自慢すらしている<sup>26</sup>。

発言は、国内向け、軍人向けに中国の政治制度の優位性をアピールする意図がうかがえるが、習近平は自信と対外不信、不安の間で揺れ動いているようにもみえる。党の忠誠を繰り返し求める執拗さは不安と危機感の裏返しでもある。不安があるからこそ「党の安全保障」は重要になる。

### 3. 新たな冷戦構造

2016年7月26日の政治局集団学習会で習近平は「近い一時期、我が国の急速で壮大な発展に対し、一部の国家は戦略的なけん制と包囲を強める。我々は不信感があるが恐れず、あえてことを起こさないが起きることを恐れない」と語った<sup>27</sup>。中国からは挑発しないが、挑戦されれば妥協しない。2018年夏から始まった米中貿易摩擦は、中国にとってまさに「発展する中国に対する戦略的なけん制」だ。習近平の発言は隔々に浸透しており、貿易戦でも中国が一方的に折れる可能性は低い。米中の新たな冷戦が始まったといえる状況だろう。

一方で、中国は社会主義色を強めており、習近平指導部下でイデオロギー対立が目立つようになった。中国は国家と党が一体化した制度のため、対立を克服するための「国家の安全保障」強化は同時に「党の安全保障」強化でもある。

<sup>26</sup> 習近平（2017）、「在中央军委扩大会议上的讲话」。

<sup>27</sup> 習近平（2017）、「坚持党在新形势下的强军目标努力建设巩固国防和强大军队」。

## 第5節 強軍思想の課題

### 1. 大国との衝突

習近平は「強軍化」を正面から打ち出したことにより、国際社会には中国脅威論が広がった。第1に中国が大国化し、力の顕示を控える韜光養晦路線も放棄したことで、米国の警戒感が強まった。2019年10月1日の軍事パレードでは米国や中国の周辺国に威圧感を与える新型兵器が多数公開された。中でも極超音速兵器は、核兵器に次ぐ次世代戦略兵器ともいわれ、各国が開発を競っている注目の装備だった。極超音速で飛翔する新型兵器は米国が構築したミサイル防衛システム（MD）も無力化する。米国も極超音速兵器を開発できておらず、中国が先行しているといわれる。米議会の諮問機関「米中経済安保見直し委員会」の2014年報告書は、中国が20年までに開発に成功する可能性がある」と警戒感を示した。米国のグリフィン米国防次官（研究開発担当）は2018年3月6日、『極超音速』が米国の最先事項だ」と語り、中国の開発に危機感を示した<sup>28</sup>。

米国は既に安全保障面で中国封じ込めに動いており、強軍化で米中摩擦が激しくなるのは避けられない。習近平への権力集中として「主席責任制」を教える軍内教材『军委主席负责制学习读本』は「強大な軍隊は国家が大国から強国に向かうときの戦略的支えだ。これが（台頭する新興国は既存の大国との衝突は不可避とする）トゥキディデスのわなを突き破り、台頭する国家の安全の苦境を突破する手段だ」と指摘している<sup>29</sup>。強大な武装力で米国との“対決”を乗り切ろうとしていることがうかがえる。

### 2. イデオロギーの軋轢

第2に前述の通り中国共産党は社会主義色を強めており、イデオロギー

<sup>28</sup> 共同通信（2018）、3月18日「極超音速でも軍拡加速」。

<sup>29</sup> 中央军委政治工作部（2018年）、21ページ。

を巡る大国や周辺国との摩擦が一層強まるのは避けられない。習近平自身も、中国は西側の自由主義体制とは相容れないと声明している。強軍目標を解説する国防大学の教材『党在新時代的強軍目標』<sup>30</sup>は「特に我が国は発展中の社会主義大国として西側社会制度と本質的な差異があり、発展するほど妨害と圧力は強まり、リスクと試練も増える」とイデオロギー的な対立克服のための強軍の必要を強調している。自由民主主義国家による「和平演変」への習近平指導部の猜疑心は強く、自由民主主義国家との摩擦は強まる。

### 3. プロフェッショナル化との矛盾

第3に軍部隊を統合作戦指揮化し、ハイテクを駆使した兵器を運用するには、練度の高い軍人を必要とする。そのためにはエキスパートとしての軍人、プロフェッショナル化がこれまで以上に求められる。第19回党大会の政治報告でも「職業軍人制度」の深化を指摘した。だが一方で、共産党は党への絶対的忠誠を求めており、これはプロフェッショナル化とは矛盾するものだ。国民党軍から出発した台湾（中華民国）の軍隊も近代化、民主化に伴い、軍のプロフェッショナル化が進み、軍は党から独立した国家の軍隊となった。人民解放軍は逆向きに進んでいる。プロフェッショナル化した職業軍人からは「党の軍隊」であることへの疑念が絶えず出てくる可能性がある。胡錦濤国家主席時代の2012年には、軍事理論家として知られ、解放軍の次期総参謀長候補にも名前が挙がっていた章沁生副総参謀長（当時、上将）が、解放軍の国軍化を主張したため党中央軍事委員会から停職処分を受けたといわれている。

### 4. 体制維持のための軍拡

第4に多方面での軍拡により増大する軍事費の問題である。中国の発表

<sup>30</sup> 任天佑、照周賢（2018）、217ページ。

によると2019年の国防予算は、前年比7.5%増の約1兆1,898億元（約1,690億ドル）。スウェーデンのストックホルム国際平和研究所（SIPRI）によると、もっと多く2018年は前年度比5%増の推定2,500億ドル。いま中国では3隻目の空母を上海で建造中、4隻目に原子力空母を建造するともいわれているが、維持するだけでも膨大な経費が掛かる。中国は核ミサイル分野でも極超音速兵器のほか、対艦弾道ミサイルなど次々と新型兵器を開発している。また米国に匹敵するミサイル防衛システムも開発中だ。中国側の発表では国防費は国内総生産（GDP）比では約1.3%（2012～17年平均）で、主要先進国よりも低い水準としている。ただ中国軍には国防費とは別の概念の「軍事経費」があり、国防科学研究事業を含めた軍事経費は国防費よりはるかに多い<sup>31</sup>。現在のような開発を続ければ軍事経費は増え続けるのは避けられない。

習近平は強軍路線で政治体制の異なる自由民主主義諸国との対立を強め、同時に政権転覆を謀られるという警戒感も強めた。軍内会議でも上述のように西側諸国による政権転覆、カラー革命などに繰り返し言及している。またグローバル化、情報化の中、国民が共産党を信頼しなくなるのでは、という懸念も強まっている。一党支配という政治体制維持のために国民のナショナリズムを動員して求心力を高め、内外に対し武装力を強化しなければならない。「党の安全保障」のため軍拡に歯止めがかからない。

習近平政権の安全保障政策を特徴付ける強軍思想は、大国路線を正面に掲げたことで、多くの新たな課題を抱え込むことになった。

## 参考文献

<日本語>

山口信治（2017）、「中国共産党第19回全国代表大会の基礎的分析：②習近平強軍思想」防衛研究所NIDSコメンタリー。

<sup>31</sup> 共同通信（2011）、「隠れた軍事費が存在」2011年11月23日配信。

阿南友亮（2015）、党の安全保障と人間の安全保障、『チャイナ・リスク』岩波書店。

矢吹晋（2018）、『中国の夢 電腦社会主義の可能性』花伝社。

土屋貴裕（2015）、『現代中国の軍事制度』勁草書房。

阿南友亮（2017）、『中国はなぜ軍拡を続けるのか』新潮社。

<中国語>

「在中国共产党第十九次全国代表大会上报告」（2017）、<[http://www.gov.cn/zhuanti/2017-10/27/content\\_5234876.htm](http://www.gov.cn/zhuanti/2017-10/27/content_5234876.htm)>2019年11月17日閲覧

周俊杰（2018）、「习近平强军思想的创立形成」<<http://theory.people.com.cn/n1/2018/0704/c40531-30124047.html>>2019年11月22日閲覧。

姜铁军（2015）、『党的国防和军队改革思想研究』军事科学出版社。

新華網（2017）、「在庆祝中国人民解放军建军90周年大会上的讲话」<[http://www.xinhuanet.com//politics/2017-08/01/c\\_1121416045.htm](http://www.xinhuanet.com//politics/2017-08/01/c_1121416045.htm)>2019年11月22日閲覧

張翬（2018）、05月19日「马克思主义军事理论本身就是战斗力」光明日報

解放日报（2017）、11月30日「习近平强军思想开辟人民战争新境界」

張学良（2019）、『强军论』中央党校出版社。

習近平（2014）、『习近平关于国防和军队建设重要论述选编』解放军出版社。

中央军委委员会政治工作部编（2018）、『军委主席负责制学习读本』解放军出版社。

陶传铭主编（2018）、『提高国防和军队建设法治化水平』国防大学。

方文彬、邱圣宏（2018）、『作风优良是我军鲜明特色和政治优势』国防大学。

習近平（2015）、『习近平关于国防和军队建设重要论述选编（二）』解放军出版社。

習近平（2017）、『习近平论强军兴军』解放军出版社。

中央军委政治工作部（2018年）、『军委主席负责制学习读本』解放军出版社。

任天佑、照周贤（2018）、『党在新时代的强军目标』国防大学。